

佳作

感動の連鎖

埼玉県 大宮国際中等教育学校四年 由浅 結依菜

「お姉ちゃん、一緒に遊ぼう。」

子どもたちの元気な声で、私の土曜日の午後は始まる。私は、毎週土曜日の午後、こども食堂にボランティアとして参加しているのだ。こども食堂とは言っても、子どもとご飯を食べるためだけの場所ではない。多くの子どもが集う、地域の居場所でもあるのだ。私は、幼児と一緒に遊んだり、小学生に勉強を教えたり、こども食堂で行うワークショップを手伝ったりして過ごしている。私がこのボランティアに毎週続けて参加している理由は一つだ。それはこの居場所が、子どもたちの成長と喜びと、そして感動に溢れているからだ。

例えば、割り算が苦手な子に根気強く教えたら、問題を一人で解けるようになっていた時。例えば、嫌いだと話していた野菜を、渋い顔をしながらも一口食べていた時。例えば、積み木の積み方のコツを教えたら、高く積み重ねられるようになっただけでなく、さらに高みを目指していた時。そんな子どもたちのできなかったことが「できる」ようになる瞬間を見届ける度に、私は胸がい

っぱいになる。この瞬間に私が直接的に影響していた場合は尚更だ。自分の壁を乗り越えて、一步成長した子どもが笑顔になる瞬間を見ると、私も自然に笑みが広がる。それだけでなく、私も苦手なことを頑張ろう、と思えるほどの勇気をもたらえるのだ。傍から見たら、子どものたった一つの小さな成功体験かもしれない。しかし私がここまで感動できるのは、毎週その子を見ているからかもしれない。苦手な算数にも諦めずに取り組んでいた姿、野菜をいつも残していた姿、一人で積み木と真剣に向かい合っていた姿。その今まで見てきた小さな姿は、成し遂げた成長の大きさを感じさせ、言葉にできないほどの感動と勇気を私にもたらしているのだと思う。このように、こども食堂には数え切れないほどの成長と喜びと、感動の瞬間に溢れているのだ。

一方、こども食堂のスタッフの方と話していた際に、子どもたちの「体験格差」を知った。こども食堂に来ている子どもたちの中には、家に帰っても両親がおらず、一人の留守番を余儀なくされている子どもや、経済的な事情で旅行や習い事があまりできない子どももいるという。そして体験格差は、子どもたちの成長の機会や感動体験の損失にも関連することを学んだ。いつも私は、子どもたちから感動を「受け取る側」の立場にいた。でも体験格差の事実を知った時、次は私が、子どもたちに感動を「与えられる側」の立場になりたいと思うようになった。私にできることを考え、たどり着いた答えは、地域の

人と協力して行うワークショップの開催だ。こども食堂は地域の居場所であり、地域での協力やつながりにより成り立っている現状がある。子どもたちに新たな感動体験を提供し、さらに地域のつながりを強固にできるもの

こそが、共催のワークショップであると考えたのだ。そこでこども食堂の近くにある、地元のパン屋さんに協力を依頼することにした。パン屋さんを選んだ理由は、以前に私が初めてパンを作った際に、手間と時間をかけると、粉からパンへ徐々に形が変わっていく過程に驚き、小さな感動を感じたからだ。パン屋さんに協力を承諾してもらえよう、ワークショップの概要等をまとめた資料を作り、プレゼンの準備を行い、交渉をしに行った。とても緊張したが、無事に承諾をもらえた時は努力が実を結んだように感じ、本当に嬉しかった。

打ち合わせやリハーサルを経て迎えた当日。参加した十人の子どもたちは、パン屋さんの指導をもとに、ロールパンとアンパンマンパンを、生地から作った。焼き上がった手作りのパンは、形こそ不恰好であったが、味は格別だった。全員がすごい、美味しいと言いながら食べている様子を見ると、私は心から喜びに満たされ、今までの苦労も、たいしたことがなかったようにさえ感じられた。

ここまで私が行動できたことの原動力は、子どもたちにも、私が味わったパン作りの感動を感じてほしい思いが根本にあったからだ。しかし結局、ワークショップの

開催で最も感動したのは私であったと思う。今までの努力が子どもたちの笑顔に変わった瞬間、私の胸には、込み上げてくる感動があった。

感動が動かすのは、心だけではない。行動を動かす、原動力にもなるのだ。そして感動は、人から人へと連鎖していく。これらは、私がこの経験から学んだことだ。小さな成功と感動でも、それは子どもたちにとっての自信となり、次の新たな一歩へつながる。また、私も子どもたちの成長に感動し行動したことで、自分をも感動させられる経験を得ることができた。感動の連鎖をつなげていくために私は、今後も一瞬一瞬の感動を大切にし、感動を与えられる人でありたいと思う。